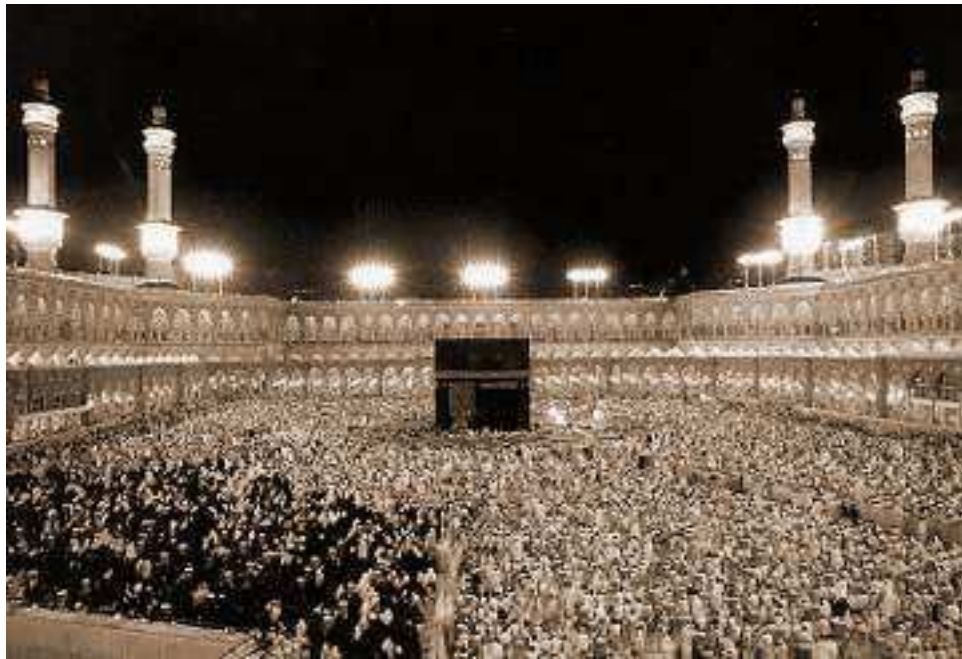


بسم الله الرحمن الرحيم  
慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

# ラマダーンにそなえよう

فلنستعد لاستقبال شهر رمضان المبارك



イスラミック・サークル・オブ・ジャパン  
Islamic Circle of Japan



# もくじ

編訳者前書き	5
スィヤーム(齋戒)とは	6
スィヤームの定められた歴史	7
ラマダーン月齋戒義務の根拠	
ラマダーン月の確定方法	8
スィヤームが義務づけられる条件	9
スィヤーム(断食齋戒)の必須事項	11
タビート(床に着く前に気持ちを確かめること)が サウム成立の条件となるかどうかについて	13
断食齋戒を解いてしまうものを戒めることに関して	14
うっかり何かを口にしてしまった場合のサウムが 無効となるかどうかについて	15
食べるか飲むかして、わざとサウムを無効にした人に 「カッファーラ(償い)」が義務づけられるかどうかについて	16
ラマダーンの日中、意図的に夫婦の契りを交わした人へ義務づけられる 「カッファーラ(償い)」のありかたについて	17
夫婦がサウム中にキスをしたり、触れ合ったりすることについて	19
サウムの礼儀	21
イウティカーフ(お籠り)について	23
断食齋戒の秘密－『宗教諸学の復活』より－(前編) 「やすらぎ」2004年9月号掲載文	28
断食齋戒の秘密－『宗教諸学の復活』より－(後編) 「やすらぎ」2004年10月号掲載文	33
アムル・ハーリドの『ラマダーン－絶好のビジネス』	38
ラマダーン・プログラム	48

روى البخاري ومسلم عن النبي المصطفى صلى الله عليه وسلم عن ربه جلّ جلاله:  
قال الله تعالى:

كُلُّ عَمَلٍ ابْنِ آدَمَ لَهُ،  
إِلَّا الصَّوْمَ،  
فَأِنَّهُ لِي وَأَنَا أُجْزِي بِهِ.

人のあらゆる行いは人自らのためにある。

サウム（断食齋戒）をのぞいては。

サウムはわれのためにあり、

われが報奨を与えよう。

（アルブハーリーとムスリム出典の聖ハディース  
～預言者さまがアッラーの御言葉として言われたもの～）

### 編訳者前書き

アルハムドゥリッラー、我らが主アッラーにこそすべての称讃あれ。そして我らが指導者ムハンマドさまとご家族ご教友全員に、最高の祝福と平安がありますように。

今般、イスラミック・サークル・オブ・ジャパン有志のご好意により、今までは手作りの小冊子でしかなかった本書が晴れて出版されることとなった。彼ら有志にアッラーのよき報奨がありますように。2003年のラマダーンに訳出したものが、少しずつ改良と補充を重ねて現在の版となったわけだが、まだまだ改善の余地があることは明らかである。インシャーアッラー、今後またその機会に恵まれることを祈りたい。

本冊子はいわばラマダーンを迎えるにあたっての「サウム(断食齋戒)特集」とでも言えるものだが、基本的な行為規範学(フィクフ)上の規定をまとめたものと、いくつかの読み物を収録している。行為規範学に係るまとめは、基本的に「シャーフィイー学派」の規定にのっとっていることをご了解いただきたい。シャーフィイー学派といえば、私たち日本人ムスリムにとっては地理的にも心理的にもいちばん近いマレーシアやインドネシアなどの東南アジアのムスリム諸国で主流の学派である。無論、インド・パキスタン系ムスリムとの国際結婚組が圧倒的に多い日本では「ハナフィー学派」に従う人も多いだろうことを考慮して、ハナフィー学派の見解として特記すべきはしてあるつもりなのでご安心いただきたい。特記なき場合は両派の見解に大きな違いはないと捉えていただければ幸いである。とはいえ、あいにく本格的な比較法学書としての体裁は整えていないため、過不足の批判は心してお受けせねばなるまい。

いずれにしても、学派の違いは学校の違いで流儀ややり方の違いに過ぎず、見解の相違による争いや優劣をつけ合うものであっては断じてならない。特定の学派に従うことで、ムスリムとしてのよりよき成長が望めることは確かだが、初心者が無理して特定の学派に従う必要はない。最初は自分の先生が従う学派にのっとることを基本としつつ、学習を深めていくのが理想的である。大切なのは、イスラームという大道における相違は豊かさであり、慈悲であるということを理解することにほかならない。境遇や能力に違いのある私たちに教示されるやり方が「たった一つ」では、やり辛くてかなわないだろう。「わたしの共同体の違いは、ラフマ(お慈悲)です。」と預言者ムハンマドさま(祝福と平安あれ)が言われたとおりである。

願わくは至高のアッラーがこの拙い試みを祝福し、ムスリム同胞にとって役立つものとしてくださいますように。本冊子を手にとってくださいました皆さんをはじめ、世界中のムスリム同胞にとってのラマダーンが、毎年祝福に満ちた、幸多きものとなりますように。アーミン。

アブー・ハキーム 前野  
ヒジュラ暦 1428 年シャアバーン月 21 日  
=2007 年 9 月 3 日(月) 行徳にて

## 《スィヤーム(齋戒)とは》

★言葉の意味としては ⇒ 話であれ、食べ物であれ、ものを戒めること。

<根拠>

(إِنِّي نَذَرْتُ لِلرَّحْمَنِ صَوْمًا فَلَنْ أُكَلِّمَ الْيَوْمَ إِنْسِيًّا)

『私は慈悲深き主に齋戒の約束をしました。だから今日は、誰ともお話し  
しません。』 (第19 マルヤム章 26 節)

☆ シャリーアでは ⇒ 自覚をもってファジュル(夜明け前)の入り時刻からマグリブ(日没)まで、ムファッティル(齋戒を解いてしまうもの)を戒めること。

↑このアーヤ(クルアーンの一節)では、「スィヤーム(صيام)」ではなく「サウム(صوم)」という言葉で身を律すること(ここでは人と話をしないという身の律し方)が表されているが、アラビア語ではこの両方の言い回し(スィヤームとサウム)によって「断食齋戒」が意図される。

動詞の応用でいえば、「サウム」のほうが馴染みやすいだろう。

サーマ、ヤスーム、サウマン

صوما صام                  يصوم

断食齋戒した、断食齋戒する、断食齋戒すること

## 《スィヤームの定められた歴史》

ラマダーン月のスィヤーム（断食齋戒）が定められたのは、マッカからマデイーナ（元ヤスリブ）へのヒジュラ後二年目のシャアバーン月のことで、スィヤームそのものは預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）と時代を共にした啓典の民（ユダヤ教徒、キリスト教徒）にとっても、それ以前から馴染みのあるものであった。至高のアッラーは仰せられている。

『信仰する者たちよ、汝ら以前の者に定められたように汝らに齋戒が定められた。汝らも主を畏れるであろう。』  
(第2バカラ章 183 節)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الصِّيَامُ كَمَا كُتِبَ عَلَى الَّذِينَ مِن قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ

## 《ラマダーン月齋戒義務の根拠》

### ☆ アッラーの御言葉より

⇒『ラマダーン月こそは、人々への導きとして、また導きと識別の明らかな証としてクルアーンが下された月である。それで汝らのうち、この月を見たもの（迎えたもの）は齋戒するがよい。』 (第2バカラ章 185 節)

شَهْرُ رَمَضَانَ الَّذِي أُنزِلَ فِيهِ الْقُرْآنُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَبَيِّنَاتٍ مِّنَ الْهُدَى  
وَالْفُرْقَانِ فَمَن شَهِدَ مِنْكُمُ الشَّهْرَ فَلْيَصُمْهُ

### ★ 預言者さまの御言葉より

⇒『イスラームは五つの柱からなっています。アッラーのほかには神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒と証言（シャハーダ）すること、サラ（礼拝）を確立し、ザカー（喜捨）を払い、ハッジ（大巡礼）とラマダーンの齋戒を果たすことです。』 (アルブハーリーとムスリム出典)

بُنِيَ الْإِسْلَامُ عَلَى خَمْسٍ: شَهَادَةِ أَنْ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ، وَأَنَّ مُحَمَّدًا رَسُولُ اللَّهِ، وَإِقَامِ  
الصَّلَاةِ، وَإِيتَاءِ الزَّكَاةِ، وَحَجِّ الْبَيْتِ، وَصَوْمِ رَمَضَانَ.

(رواه البخاري ومسلم عن ابن عمر رضي الله عنهما)

## 《ラマダーン月の確定方法》

ラマダーン月に入ったかどうかを確定するには二通りの方法がある。

- ① 三日月を目撃すること (シャアバーン月 30 日目の夜 - 陰暦では日没と共に新しい一日の夜が始まる - に成人ムスリム男性がカーディー (裁判官) の前で三日月を目撃したことを証言することにより確定)
- ② シャアバーン月を 30 日全うすること (曇り空で三日月が見えない場合、証人が現れない場合)

**根拠** ⇒ 預言者さま曰く、『それ (三日月) を見ることで齋戒を始め、それを見ることで齋戒月を明けなさい。曇って見えない場合は、シャアバーンの期間を 30 日間全うしなさい。』  
(アルブハーリーとムスリム出典)

صُومُوا لِرُؤْيَيْتِهِ، وَأَفْطِرُوا لِرُؤْيَيْتِهِ،

فَإِنْ غَمِيَ عَلَيْكُمْ فَأَكْمِلُوا عِدَّةَ شَعْبَانَ ثَلَاثِينَ يَوْمًا.

(رواه البخاري ومسلم)



《別の地域に住むムスリムの三日月確認によって、  
世界中のムスリムにラマダーン開始が義務づけられるかどうかについて》

☆四大法学派の見解は、二つに別れる。

《1》 多数派 (ハナフィー学派とマーリキー学派、およびハンバリー学派)  
⇒ 義務づけられる



論拠⇒月の確認をもってサウム開始を命じるアッラーの御言葉は、一部の者に限定されておらず、ムスリム全員に向けられたものであるから。

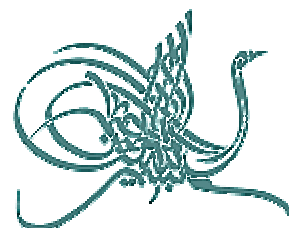
## 《2》 シャーフィー学派

⇒ 義務づけられない。

むしろ地域差による月の見え方の違いが考慮されるべきである。

論拠⇒地域によって月の見え方が違うため、あくまでも「月が見えること（ルウヤトゥール＝ヒラール）」が基準である以上、各地域の上空で月が確認されないと月が見えたことにはならないから。またこの見解は、教友イブヌ・アッバース（アッラーのご満悦あれ）に伝わるものとも言われている。

《訳注》フィクフにおけるこうした見解の相違を踏まえておけば、毎年ラマダーン開始時や終了時に世界の西や東、あるいは日本国内でも、のっとる法学派の違いで一日のズレが生じることについて目くじら立てて議論を交わすこともないだろう。



## 《スィヤームが義務づけられる条件》

### ① 「タクリーフ（義務遂行可能要素）を備えていること

アッラーが定められた人間としての義務を果たすには、最低三つの要素を備えていることが肝要。ムスリムであり、肉体的に成人であり、精神的に正常であることである。

根拠⇒教友アリー・ブン・アビー・ターリブ（アッラーのご満悦あれ）の伝える預言

者さま(アッラーの祝福と平安あれ)の御言葉。曰く、『(行いの善悪を書き記す) ペンは三つのものからは引き留められます。寝ている者からは、目が覚めるまで。子供からは、夢精をするまで。狂人からは、正気を取り戻すまでです。』 (アブー・ダーウード出典)

رفع القلم عن ثلاثة: عن النائم حتى يستيقظ، وعن الصبي حتى يحتلم، وعن المجنون حتى يعقل. (رواه أبو داود عن سيدنا علي كرم الله وجهه)

## ② 齋戒が禁じられる、あるいは齋戒を解いてもよい状態にないこと

### ☆ 齋戒が禁じられる状態

- a—月経、産褥
- b—気絶、発狂

### ★ 齋戒を解いてもよい状態

- a—病気
  - 病気の原因になる場合
  - 病気の回復を遅らせる場合
  - 激痛を起こさせる場合
  - 身体の一部を歪めてしまう場合
  - 病気を悪化させてしまう場合

- b—83 キロを超えるだけの長旅
  - シャリーアに適った旅であること
  - 日中ずっとの旅であること

『病気にかかっている者、または旅路にある者は、別の日に(同じ)日数を。』 (2:185)

(ومن كان مريضاً أو على سفر فعدة من أيامٍ آخر)

### c—齋戒ができない場合

高齢で齋戒ができなかったり、治る見込みのない病気にかかっていた

りする場合

『それ(齋戒)に耐え難い者のつぐないは、貧者へのフィドヤ(給養)である。』(2:184)

(وَعَلَى الَّذِينَ يُطِيفُونَهُ فِدْيَةٌ طَعَامُ مَسْكِينٍ)

### 《スィヤーム(断食齋戒)の必須事項》

スィヤームを成立させるには、次の二点を全うすることが肝要。

- ① 断食齋戒のニーヤ(意図、気持ち)を持つこと
- ② ファジュルからマグリブまでの間、断食齋戒を解いてしまうものを戒めること

#### ＜ニーヤに関して＞

ニーヤを持つとは、断食齋戒をしようという気持ちを心の中で持つことである。その気持ちをあえて口にしなくてもよいが、むしろ逆に意識せず「サウムをします」という文言を口にするだけでは不十分。『あらゆる行いは、気持ち次第・・・』(アルブハーリーとムスリム出典)という預言者さま(祝福と平安あれ)の御言葉からも分かるように、習慣あるいは単なる動作と崇拜行為を区別するのは気持ちの持ち方次第だからである。

特にラマダーン月の断食齋戒を自覚するには、次の条件も満たすことが肝要。

#### ① タブイト(床に着く前に気持ちを確認すること)

根拠⇒「ファジュルの前に断食齋戒の意図を明確にしなかった者に、断食齋戒はありません。」(アッダーラクトゥニーやアルバイハキー出典)

مَنْ لَمْ يُبَيِّتِ الصِّيَامَ قَبْلَ الْفَجْرِ فَلَا صِيَامَ لَهُ.

#### ② タアイーン(具体化)

心の中でどんな断食齋戒をするつもりなのか、断食齋戒の意図の内容を具体化すること。

### ③タクラール(繰り返し)

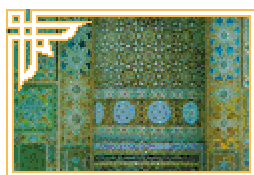
毎晩ファジュルの前にその日の断食齋戒の意図を明確にすること。ラマダーン月1ヶ月分のニーヤを一度明確にするだけでは十分とはいえ、毎日新たに与えられるイバーダ(崇拝行為)の機会をその都度再認識するためにも、ラマダーン月断食齋戒の意図を繰り返し明確にする。(マーリキー学派においてのみ、最初にラマダーン月1ヶ月分のニーヤを一回明確にすればよいとされる)

とはいえ、任意の自発的な断食齋戒に関しては、タアイーンもタクラールも必要とはされず、正午前に何であれ断食齋戒の意図を抱けばよい。

根拠⇒アーイシャさま(アッラーのご満悦あれ)が伝える預言者さま(祝福と平安あれ)の御言葉。

「ある日のこと、『何か食べるものはありますか。』とお尋ねなされたので、私が「いいえ。」と答えると、『では、断食齋戒しましょう。』と言われたのでした。」  
(アッダーラクトゥニー出典)

حديث السيدة عائشة رضي الله عنها أن النبي صلى الله عليه وسلم قال لها يوماً:  
هل عندكم من غداء؟ قالت: لا. قال: فإني إذا أصوم. (رواه الدارقطني)



《タブイート(床に着く前に気持ちを確かめること)が  
サウム成立の条件となるかどうかについて》

☆四大法学派の見解は、三つに別れる。

《1》マーリキー学派

⇒ 義務であれ、任意であれ、あらゆるサウムに条件づけられる。

根拠⇒「ファジュルの前に齋戒の意図を明確にしなかった者に、齋戒はありません。」  
という前述のハディースの普遍性

## 《2》ハナフィー学派

⇒ カダーウ（埋め合わせ）のサウムや  
非具体的なナズル（誓約）のサウムに条件づけられる。  
ラマダーンや具体的なナズル、任意のサウムには条件づけられない。

根拠⇒アルブハーリーとムスリムが出典する  
教友サラマ・ブン・アル＝アクワウの伝承  
預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）はアスラマ出身の男にアザーンを命じ、「すでに食事を済ませた人は今日の残りをサウムし、まだ何も口にしていない人はそのまま最後までサウムをなさう。今日はアーシューラーの日だからです。」と人々に告げるように言われた。

論旨⇒アーシューラーの日（ムハツラム（陰暦1月）10日）にサウムするのは義務であったが、ファジュル前に意志確認をしていなくてもイムサーク（日没まで抑制すること）が認められた点に注目。具体的に何のサウムかがはっきりしている人は、夜間に意志確認をしなくても日中すればよいから。任意のサウムについては、アーイシャのハディースがその論拠となっている。

## 《3》シャーフィイー学派とハンバリー学派

⇒ 義務のサウムすべてに条件づけられる。

根拠⇒アーイシャのハディース。  
預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）は、ファジュルの後で任意のサウムをしようとされた。

# 《断食齋戒を解いてしまうものを戒めることに関して》

## ① 飲食

少量であれ、わざと食べ物や飲み物を口にした場合は断食齋戒が無効とな

ってしまうが、自分が断食齋戒中だということを忘れてうっかり口にしてしまった場合は無効とはならない。

**根拠**⇒教友アブー・フライラ（アッラーのご満悦あれ）が伝える預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）の御言葉。

「自分が断食齋戒中の身であることを忘れて食べたり飲んだりしてしまった者は、断食齋戒を全うしなさい。アッラーが食べさせ、飲ませてくださったのです。」

（ムスリム（1155）、アルブハーリー（1831）の出典）

مَنْ نَسِيَ وَهُوَ صَائِمٌ فَأَكَلَ أَوْ شَرِبَ فَلْيَتِمَّ صَوْمَهُ، فَإِنَّمَا أَطْعَمَهُ اللَّهُ وَسَقَاهُ.

（رواه البخاري ومسلم）



## 《うっかり何かを口にしてしまった場合のサウムが無効となるかどうかについて》

☆四大法学派の見解は、二つに別れる。

《1》多数派（ハナフィー学派とシャーフィイー学派とハンバリー学派）

⇒ **無効とはならない。**したがってカダーウ（埋め合わせ）もカフアーラ（償い）も義務づけられることはない。

論拠⇒『忘れて食べたり飲んだりしてしまった者は、齋戒を全うしなさい。』というハディースの明瞭さ。預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）はうっかり何かを口にしてしまった者に対して「サウムを全うしなさい。」と言われた。もし無効となっていたら、「全うしなさい」とも、「サウムを」とも言わなかったはずである。

《2》マーリキー学派（イマーム・マーリクとその師ラビーア）

⇒ **無効**となる。その日は最後までイムサーク（齋戒を解いてしまうものを抑制）し、後日その埋め合わせをしなければならない。  
論拠⇒キヤース（類推）の基本を考慮。サウムは義務のひとつであり、もの忘れで何かを口にすることは義務の成立条件を損ねてしまうため、その埋め合わせをしなければならない。命令を全うするにあたっては、もの忘れでその命令実行義務が免除されることはないからである。

**《食べるか飲むかして、わざとサウムを無効にした人に「カッファラ（償い）」が義務づけられるかどうかについて》**

☆四大法学派の見解は、二つに別れる。

**《1》ハナフィー学派とマーリキー学派 ⇒ 義務づけられる**

論拠⇒わざと夫婦の契りを交わした者に対する規定からの類推（キヤース）。サウムの神聖さを冒したという共通点が考慮されるため。

**《2》シャーフィイー学派とハンバリー学派 ⇒ 義務づけられない。**

論拠⇒ハナフィー学派とマーリキー学派が論拠とする「ある男がラマダーン中にサウムを無効にしてしまい…」（マーリクとイブヌ・ジュライジュラ出典）という伝承の解釈。「サウムを無効にした」という言葉は、同じ内容を伝えるほかの伝承との兼ね合いからも分かるように、夫婦の契りによってサウムを無効にした者のことが言わ

れている可能性があるため。(わざと飲み食いした者の規定が言及されているわけではないとする)

② 身体の穴から口腔(ジャウフー食道)に何かが入ってしまうこと

身体の穴とは、口、耳、鼻、性器、肛門のことである。

例えば耳への点滴は、耳が常に開いていて食道につながっているため齋戒を無効にしてしまうが、目への点滴(目薬をさすこと)は、目が食道につながっていないため齋戒を無効にはしない。肛門からの注射は、肛門が穴として開いていて体内につながっているため齋戒を無効にしてしまうが、血管への注射は血管が常に開いているわけではないため齋戒を無効にはしない。

ちなみに食事の味にうるさい夫を納得させるために、妻が料理の味見をしなければならぬ場合は、味見するだけでその後口から出すなら許可される(ジャーイズだ)が、できれば避けたほうがよい(マクルーフ)。

無理矢理に飲み食いさせられた場合は、自分の意志で齋戒を破ろうとしたわけではないので、無効とはならない。

③ 故意的な嘔吐…わざと吐こうとした場合はサウムが無効となるが、突然吐き気をもよおして吐いてしまった場合は、たとえその際に思わず胃から吐き出したものが少し口中から口腔(食道)にもう一度入ってしまったとしても、無効とはならない。

根拠⇒教友アブー・フライラが伝える預言者さま(祝福と平安あれ)のお言葉。

『サウムをしていて吐き気に襲われた人に、埋め合わせをする必要はありません。わざと吐こうとした場合は、埋め合わせをすべきですが。』

(アブー・ダーウッド(2380)やアッティルミズィー(720)ほかの出典)

④ 故意的な性交…訳注—たとえば暗い寝室でファジュルの入り時刻を確かめることもできずに、まだ大丈夫だろうと思ってしてしまう場合は罪を負うことなく容赦されるが、後日カダーウ(埋め合わせ)の齋戒をしなければならぬ。



《ラマダーンの日中、意図的に夫婦の契りを交わした人へ義務づけられる  
「カフファーラ（償い）」のありかたについて》

☆四大法学派の見解は、二つに別れる。

《1》多数派（ハナフィー学派とシャーフイー学派とハンバリー学派 ⇒  
順序どおり（奴隷解放、二ヶ月連続のサウム、60人の貧者への食事提供  
と可能な順に）

論拠⇒アブー・フライラが伝える預言者さま（祝福と平安あれ）のお言葉。

「ある男が預言者さまのもとへやって来て言いました。

「アッラーの御使いさま、私は身を滅ぼしてしまいました！」

預言者さまがそれに応えます。

『何があなたのみを滅ぼしたのですか？』

「ラマダーン中に妻と寝てしまったのです！」

『解放する奴隷はいますか？』

「いいえ」

『では二ヶ月続けてサウムをすることができますか？』

「いいえ」

『では60人の貧しい人たちに食事を施すことができますか？』

「いいえ」

男が腰を下ろすと、預言者さま（祝福と平安あれ）のもとにタムル（なつめやしの実）がのったお皿が持ち寄られました。

『これを施しなさい』

「私たちよりも貧しい者にですか？この町に住む家族で私たちよりそれを必要としている者たちはおりません。」

すると預言者さま（祝福と平安あれ）は、歯が見えるほどお笑いになりました。そしてこう言ったのです。

『行きなさい。そしてあなたの家族にこれを食べさせてあげるのはです。』』

（アルブハーリー、ムスリム、アブー・ダーウード、アッティルミズイー、  
アンナサーイー、イブヌ・マージャ、アフマド出典）

論旨 ⇒ あくまでも預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）は、償いのあり方を順番に挙げられたから。

《2》マーリキー学派 ⇒ 三つのうちどれかを選択

論拠⇒マーリクとイブヌ・ジュライジュら出典の伝承では、同じ内容のハディースを「あるいは」と選択を促す言い回しで伝えられているため。

《見解の比較》多数派の見解が正しいとみなされる。選択の余地を生む「あるいは」という言い回しでの伝承は、自説を擁護するためにハディース伝承者が変えたのではないかと思われる。

⑤ 自慰行為…わざとやった場合はサウムが無効となるが、中には興奮した

だけで漏らし

てしまう人もいる。わざとでない場合は、無効とはならない。ラマダーンの日中に口づけ等を行うことは、男性であれ女性であれ、性的な刺激を感じる人であれば絶対避けるべきものとみなされる。たとえ性的な刺激を感じない人でも、やはり可能性を断つために避けたほうがよい。

根拠⇒アーイシャさま（アッラーのご満悦あれ）のお言葉。

『かつてアッラーの使徒さまは、サウムをしながらも私にキスをしてくださいました。でも皆さん方の誰が、アッラーの使徒さまほどに自分の欲を抑えることができるでしょうか。（いいえ、誰にもできないはずです）』  
（ムスリム（1106）出典）

論旨⇒学者たち曰く、「アーイシャさまが言いたかったのは、『皆さんはキスするのを控えなければなりません。預言者さまと同じようにキスをしてかまわないなどと思い込んでではありません。彼は自分をコントロールできる御方でしたから、精を漏らしたり、性的興奮を覚えたり、心を濁らせたりする恐れはありませんでしたが、皆さん方がそれを保証できるわけではないからです。』ということである。」

《夫婦がサウム中にキスをしたり、触れ合ったりすることについて》

☆四大法学派の見解は、三つに別れる。

《1》シャーフイー学派とハンバリー学派 ⇒ ジャーイズ（許可）

しかしそれがきっかけで精を漏らしてしまった場合は、「カダーウ（埋め合わせ）」をしなければならない。妻を、あるいは夫を見て、あるいは夫婦の契りを想像して精を漏らした場合は、カダーウをしなくともよい。

《2》ハナフィー学派とマーリキー学派 ⇒ 念のためにマクルーフ（避けるべき）

実際にそれがきっかけで精を漏らしてしまった場合は、「カダーウ（埋め合わせ）」をしなければならない。妻を、あるいは夫を見て、あるいは夫婦の契りを想像して精を漏らした場合は、カダーウをしなくともよい。

《3》マーリキー学派内の一説 ⇒ ハラーム

実際にそれがきっかけで精を漏らしてしまった場合は、「カダーウ（埋め合わせ）」だけでなく、「カッフアーラ（償い）」もしなければならない。そして妻を、あるいは夫を見て、あるいは夫婦の契りを想像して精を漏らした場合も、カダーウをしなくてはならない。そもそも性交の目的が射精であるため、サウム中に禁じられた性交と同じ結果をもたらした以上、カダーウをしなければならないとされる。

- ⑥ 月経と産褥…仕方のないことだが、どちらもがサウムを無効にしてしまうため、日中少しでも月経や産褥に見舞われた女性は、後日その埋め合わ

せをしなければならぬ。

**根拠**⇒教友アブー・サイドが伝える預言者さま（祝福と平安あれ）のお言葉。

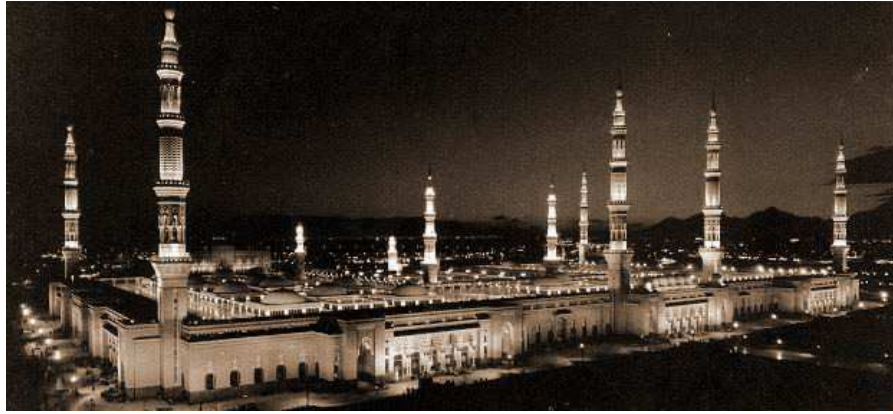
女性は宗教において欠けたところがあるということについて尋ねられたアッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）は、次のように言われたという。

『女性が月経になったら、礼拝もしなければ、齋戒もしないものではありませんか？』  
（アルブハーリー(298)とムスリム(80)の出典）

- ⑦ **発狂と背教**…そもそも「発狂」や「背教」は、人間からイバーダ（崇拜行為）を捧げる資格を打ち消してしまうため、そのどちらもがサウムを無効にしてしまう。

以上、こうしたムファッティラート（齋戒を解いてしまうもの）とファジュールの入り時刻から日没までの間に関わってしまった場合（たとえばまだファジュールになっていないだろうと思ったが、実はすでにファジュールの時間になっていたような場合）は、サウムは無効となるが、ラマダーン月の神聖さに敬意を表してその日は最後までイムサークシ（齋戒を解いてしまうものを避け）、後日その日の埋め合わせをしなければならぬ。

同じように、日中最後にもう日没になったものと思って齋戒を解いたが、実はまだ日没になっていなかったことが判明した場合は、サウムが無効となってしまうため、後日その日の埋め合わせをしなければならぬ。例えばテレビのアザーンを頼りにするような場合は、衛星放送によるほかの地域のアザーンでないかどうか要注意である。



## サウムの礼儀

サウムの礼儀は数多くあるが、中でも重要なものを挙げるとすれば…

① **イフタル(齋戒明けの食事)をなるべく早くとること**

根拠⇒教友サハル・ブン・サアドが伝える預言者さま(祝福と平安あれ)のお言葉。

「フィトル(齋戒明けの食事)を急いでいるうちは、人々もまだまだ捨てたものではありません。」(アルブハーリー(1856)とムスリム(1098)の出典)

لا يزال الناس بخير ما عجلوا الفطر. (رواه البخاري ومسلم)

② **サフル(齋戒前の食事)をとること**

根拠⇒預言者さま(祝福と平安あれ)のお言葉。

「サフルをとるようにしなさい。サフルにはバラカ(恩寵)があります。」  
(アルブハーリー(1823)とムスリム(1095)の出典)

تسحروا فإن في السحور بركة. (رواه البخاري ومسلم)

「サフルをとるようにしなさい。たとえコップ一杯の水であっても。」

(イブヌ・ヒッバーン(「マワーリド=ツ=ザムアーン」884)の出典)

تسحروا ولو بجرعة ماء. (رواه ابن حبان)

③ **サフルをなるべく遅くとること**

ファジュルの時間に入る少し前に食事をとることが勧められる。

根拠⇒預言者さま（祝福と平安あれ）のお言葉。

「イフタールを早めにし、サフルを遅めにしている限り、わたしのウンマ（信仰共同体）も大丈夫です。」（イマーム・アフマド(5/147)の出典）

لا تزال أمتي بخير ما عجلوا الإفطار وأخروا السحور. (رواه الإمام أحمد)

④ 身を慎むこと（悪口や陰口を避け、欲望を抑えること）

⑤ ファジュルの前に沐浴をすませること（グスルが必要な場合）

⑥ 齋戒明けの食事をとるときに、次の祈りを捧げること

「アッラーよ、わたしはあなたのために齋戒しました。そしてあなたを信じ、あなたの御恵みによって齋戒を解きました。渇きは失せ、身体は潤い、インシャーアッラー、報奨は確かなものとなりました。」

اللَّهُمَّ لَكَ صُمْتُ، وَبِكَ آمَنْتُ، وَعَلَى رِزْقِكَ أَفْطَرْتُ،  
ذَهَبَ الظَّمَا، وَأَبْتَلتِ العُرُوقُ، وَثَبَتَ الأَجْرُ إِنْ شَاءَ اللهُ.

アッラーフンマ ラカ スムトウ、ワ ビカ アーマントウ、

ワ アラー リズキカ アフタルトウ、ザハバ=ツ=ザマウ、

ワ=ブタツラティ=ル=ウルク、ワ サバタ=ル=アジュール、

インシャーアッラー。

⑦ サダカや善行に励むこと、クルアーンの読誦や考察、マスジド（モスク）にこもること（特にラマダーン月最後の10日間）

「ある人が尋ねました。「アッラーの御使いさま、どのサダカが一番ですか。」曰く、『ラマダーン月のサダカです。』」（教友アナスに伝わるアッティルミズィー出典のハディース）

عن سيدنا أنس رضي الله عنه قال: قيل: يا رسول الله فأي الصدقة أفضل؟  
قال: صدقة في رمضان. (رواه الترمذي)

教友アブー・フライラ(アッラーのご満悦あれ)によると、アッラーの御使いさま(アッラーの祝福と平安あれ)は言われました。

『ラマダーンに入ると、シャイターンたちは縛られて身動きできなくなります。そして天国の門は開けられ、地獄の門は閉ざされるのです。』

(アルブハーリーとムスリムの出典)

عن سيدنا أبي هريرة رضي الله عنه أن رسول الله صلى الله عليه وسلم قال:  
إذا دخل رمضان، صُفِّدَت الشياطين، وفتحت أبواب الجنة، وغلقت  
أبواب النار. (رواه البخاري ومسلم)

## 《イウティカーフ(お籠り)について》

イウティカーフとは、もともと「あるものに定着し、常時それとともにあること」を意味するが、イスラームの専門用語としては、「特別なニーヤ(気持ち)をもってマスジドに居続けること」をいう。

### ▼イウティカーフの法的根拠

「イウティカーフ」の基本は、至高のアッラーの御言葉にある。

『汝らがマスジドに籠っている間は彼女ら(妻たち)と交わってはならない。』  
(第2バカラ章 187 節)

(ولا تُبَاشِرُوهُنَّ وَأَنْتُمْ عَاكِفُونَ فِي الْمَسَاجِدِ) (البقرة 187)

それからハディースでは、アーイシャ(アッラーのご満悦あれ)がこう伝えている。  
「預言者さま(祝福と平安あれ)はラマダーンの最後の10日間お籠りをされていたものです。」(アルブハーリーとムスリム出典)

またイウティカーフは、イスラーム以前の過去の宗教においても人々に馴染みのあるものだったことがクルアーンの一節からも伺える。

『われらはイブラーヒームとイスマーイールに約束した。わが館をタワーフ(周礼)する者たち、イウティカーフ(お籠り)する者たち、ルクーウ(立礼)する者たち、スジュード(額づいて礼拝すること)する者たちのために清めよと。』

### ▼イウティカーフの意義

ムスリムたる者は、たとえ一年に一回であってもなるべく定期的に自我を律する機会を持つべきである。本来ならば許されている享樂すらもあえて自肅して、アッラーへの崇拜行為に専念することで、わがままで放っておけば調子づいて正しい道から反れようとする私たちのナフス(自我)を清めることが大切だからである。

『まことに人間のナフス(自我)は悪しきことを命じるものである。わが主の慈悲を受けたもの以外は。』(ユースフ章 53 節)

とは至高のアッラーのお言葉だが、私たちの心は日常生活を送る中で確実に埃をかぶり、さび付いてしまう。心もまた大掃除が必要なのである。

### ▼イウティカーフの法的規定

本来的にイウティカーフは「いつ行ってもよいスナ(預言者の慣行)」である。

ラマダーン中のイウティカーフはさらに好ましいものとして推奨され、特にその最後の 10 日間におけるイウティカーフはもっとも好ましい期間として強く推奨される。

イウティカーフが義務となるのは、本人が自分でそれをアッラーに誓った場合のみである。

これらをまとめてみよう。

- ① 推奨行為⇒いつでも
- ② スナ・ムアッカダ(預言者の確かな慣行)⇒ラマダーン最後の 10 日間
- ③ 義務行為⇒誓いを立てたとき

### ▼イウティカーフ成立の条件

二つの条件がそろえばイウティカーフは成立する。



① ニーヤ(気持ち)の確認

お籠りを始めるときに、「スナを見習って、イバーダ(崇拜行為)に励むためにある一定期間マスジドに居続けます」という気持ちを確認すること。したがって、何か現世的な用事のためにマスジドに入って長居したり、ただぼんやりとお籠りの意志を持たずに長居してもイウティカーフとはみなされない。

② マスジドに居続けること

一般的に「お籠り」と呼べるだけの一定時間「マスジド」に居続けること。  
(ただしハナフィー学派の規定では、女性は必ずしもマスジドに行く必要はなく、自宅で礼拝場所と定めたところ《自宅のマスジド》においてイウティカーフしてもよい)

無論このマスジドに居続けるという条件の中には、マスジドに長居してもよい条件が含まれている。ジャーバ(大汚)といってグスル(全身洗浄)が必要な状態や、ハイド(月経)やニファース(産褥)の状態にないことに加え、マスジドを汚してしまいそうな汚物が自分の服や身体についていないことである。

特に切迫した理由もないのにマスジドから出てしまった場合は、そこでその人のイウティカーフは終わりとなってしまふ。しかしながら何か特別な事情があって外出してマスジドに戻った場合は、まだその人のイウティカーフは継続中とみなされる。

なお、イウティカーフのスナをまっとうするのに「サウム(断食齋戒)」は条件とはされない(シャーフィイー学派とハンバリー学派)。もちろんよいことなので勧められはするが、サウムなしでも立派なイウティカーフである。

**「あえて自分に課すほかは、イウティカーフをする人にサウムの必要はありません。」**

(アルハーキムがイブヌ・アッバース由来のハディースとして出典)

## ((أَلَيْسَ عَلَى الْمُعْتَكِفِ صِيَامٌ إِلَّا أَنْ يَجْعَلَهُ عَلَى نَفْسِهِ))

(رواه الحاكم عن ابن عباس رضي الله عنهما)

ただし、マーリキー学派ではサウムがイウティカーフ成立の条件に数えられており、ハナフィー学派でも「誓いのイウティカーフ」ではサウムが成立条件となる(したがって自発的なイウティカーフにおいては、ハナフィー学派でもサウムは条件とされない)。

### ▼誓いのイウティカーフについて

いくつかあるイウティカーフの中でも三つ目のタイプのものである。

もしある一定の期間イウティカーフをし続けると誓いを立てた場合は、大小の用を足すことや、ウドゥー(礼拝前のお清め)など、必要に差し迫られたとき以外は Masjid から外出してはならない。

気晴らしなど、特に事情もなく外出することは禁じられる。またそこでイウティカーフは無効となってしまう、一定期間続けると誓った以上、もう一度始めからやり直さねばならない。

もしある特定の Masjid でイウティカーフをするという誓いを立てた場合は、必ずしもその Masjid でイウティカーフを果たさずともよいとされる。ただし、アル Masjid ・アルハラーム(マッカの聖モスク) やアル Masjid ・アンナバウィー(マディーナの預言者モスク)、アル Masjid ・アルアクサー(エルサレムのアクサー・モスク)におけるイウティカーフを誓った場合は別である。それぞれが特別な聖地であることやそこで捧げられる崇拝行為の報奨が倍増されることなどが考慮されるからにほかならない。また聖地としての順位から、アル Masjid ・アルハラームはほかの二つの Masjid の代わりとなり、アル Masjid ・アンナバウィーはアル Masjid ・アルアクサーの代わりとなるが、その逆にはならないので要注意である。

### ▼イウティカーフの礼儀

- ① 至高のアッラーによりよく仕えるための善行に従事すること。ズィクルやクルアーンの読誦、イスラーム学の勉強など、イウティカーフの目的達成にふさわしい行いが望ましい。
- ② スィヤーム(断食齋戒)をすること。断食齋戒をしながらのイウティカーフのほうがよりよいからである。また、断食齋戒をしたほうが余計な欲にとらわれず、精神を集中し、自我を清めやすくなる。
- ③ ジュムアの集団礼拝が行われるような大きなマスジドでイウティカーフをすること。
- ④ よいこと以外は口にしないこと。罵詈雑言はもちろんのこと、陰口や悪口、あるいは無駄口をきかないこと。

### ▼イウティカーフ中に避けるべきこと

- ① ヒジャーマ(血液吸引療法)。マスジドが汚れずに行える場合はマクルーフ(避けるべきこと)だが、マスジドが汚れてしまいそうな場合はもっと確実に避けるべきハラーム(禁じられたこと)となる。
- ② 少しでも売買をすること。また裁縫などの手仕事を長時間すること。

### ▼イウティカーフを無効にしてしまうもの

- ① 故意の性交(たとえ射精までいかなくとも)。性交なしの接触(キスや肌に触れることなど)は、それで興奮して射精しないかぎりイウティカーフを無効にはしない。
- ② 必要なしにマスジドから外出しないこと。
- ③ 背教、泥酔、発狂。
- ④ 月経、産褥。どちらもマスジドに居座ってはならない状態となるため。

いずれにしても、誓いのイウティカーフではなく、あくまでも自発的な

任意のイウティカーフをしている場合は、自由にマスジドから外出してもかまわず、戻ったらまたニーヤ(気持ち)を改めればよい。

# والحمد لله رب العالمين

あらゆるものの主、アッラーにこそすべての称讃あれ

بسم الله الرحمن الرحيم

サ ウ ム  
断食齋戒の秘密 – 『宗教諸学の復活』より – (前編)

イフヤー・ウルミッディーン  
「やすらぎ」2004年9月号掲載文 / アブー・サキーナ前野@ダマスカス

シャリーア（アッラーの定めし掟—人間の表面的な行為の規範）とハキーカ（真理—人間の精神的な道しるべ）を学問的に調合させることに成功した、イスラーム史上最大の思想家にして学者のひとり、アブー・ハーミド・アル＝ガッザーリー師（西暦1058～1111年）。イランのホラーサーン地方トゥース出身の彼は、ラテン名「アルガゼル」としても有名だ。数多い著作の中でもとりわけ有名な彼の代表作、「宗教諸学の復活（イフヤー・

ウルミ=ツ=ディーン)」の第一巻「サウムの秘密」章から、今年のラマダーンに向けていくつか学ばせていただくことにしよう。

まずは彼の慣例通り（ガッザーリー師に限らず、諸学者一般の慣例でもあるが）クラーンとスナナの引用から、サウムの徳を確認したい。

「サウムは、信仰の4分の1を占めるものである。『サウムは忍耐（サブル）の半分。』（訳注1）、『忍耐は信仰（イマーン）の半分。』（訳注2）」と預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）のお言葉にあるとおりだ。

それからサウムは、もろもろの義務行為の中でも至高のアッラーに直接結びつけられる点で特別である。『すべての善行には10倍から700倍の報奨を。断食齋戒だけを除いては。それはわがためにあり、われがそれに報いよう。』（訳注3）」と預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）の口を借りて至高のアッラーが言われていることから明らかだ。

至高のアッラーは、直接こうも仰せられている。

『まことに耐え忍ぶ者たちには限りない報奨が与えられよう。』（第39ズマル章10節）

サウムは忍耐の半分であり、その報奨は推量や計算の枠を超えているというわけだ。サウムの徳に納得するには、預言者さまのお言葉をいくつかあげれば十分であろう。

「わたしの自我を手中にする御方に誓って。断食齋戒する者の口臭は、アッラーの御許では麝香（じゃこうーミスク）の香りよりも芳しいのです。至高のアッラーは仰せられています。『彼（断食齋戒する者）が欲を抑え、食べ物も飲み物も口にしないのは、わがためである。サウムはわがためにあり、われがそれに報いよう。』」（訳注4）」

「ジャンナ（天国）にはライヤーンと呼ばれる扉があり、そこからは断食齋戒する者たち以外は入れません。』（訳注5）」

サウムの報奨には、至高のアッラーとの謁見も約束されている。預言者さま曰く、「断食齋戒する者にはふたつの喜びがあります。イフタール（断食を解く食事）をとる時の喜び、そして主とお会いするときの喜びです。』（訳注6）」

「すべてのものには、入り口があります。イバーダ（崇拝行為）の入り口はサウムです。』（訳注7）」

さらにアブー・フライラによれば、預言者さまは次のように言われた。

「ラマダーン月に入ると天国の門が開かれ、地獄の門は閉ざされます。シャイターン（悪魔）どもは足かせをつけられて、『善行を求める者は来たれ。悪行を求める者はおとなし

くせよ。』と呼びかける者の声が響き渡ります。(訳注8)」≫ (宗教諸学の復活 1/310 より)

以上、実はガッザリー師のクルアーンやハディースの引用はまだまだ続くが、ここでは思い切って割愛させていただきたい。サウムをするにあたっての必要不可欠な行いや、サウムを無効にしてしまう諸点など、いわゆるサウムの基本は、イスラーム法学での解説に譲ることにしよう。

「サウムの秘密」に関して、ガッザリー師は「サウムの秘密と内面的条件」という小題で次のように解説している。

≪サウムには、三つの段階があることを知るがよい。普通の人のサウム、特別な人のサウム、特別な人の中でもさらに特別な人のサウムがそれである。

普通の人のサウムとは、食欲と性欲を前述(本稿では割愛)の条件に基づいて抑えること。

特別な人のサウムとは、耳と目、舌と手足、身体的全器官を罪から守ること。

特別な人の中でもさらに特別な人のサウムとは、低俗な関心事や世俗的な思いから心を引き離し、至高のアッラー以外のものすべてから全身全霊を守ること。それゆえこの種のサウムは至高のアッラーや審判の日以外のことを考えただけで無効になってしまう。あるいは宗教的な目的で考えるこの世(その場合は現世的なことも来世の糧となりうるため)とは別に現世的なことを考えた場合もまた然り。心の清らかさを常に求める者たちは次のように言うくらいである。

「日中にイフタールは何にしようかなどと思いをめぐらす者には、過ちが加算されるだけである。なぜならそうした思いを抱くのは、至高のアッラーの恵み深さに対する信頼が足りないからであり、約束されたアッラーの糧に対する確信が足りないからである。」

これは預言者たち(ナビーユーン)や篤信者たち(スィッディークーン)、アッラーの近くまで高められし者たち(ムカッラブーン)の位階にほかならず、理論的にその位階について語るには限界があるが、いかにしてその位階に達するか、実践の何たるかはわかる。自らの全身全霊すべてでもって至高のアッラーに近づこうとし、アッラー以外のものからは離れ去ることだ。

さて、特別な人、つまり正しき人たち(サーリフーン)のサウムに関して言えば、それは罪から身体的全器官を守ることであり、これから述べる六つの事柄を満たすことで

達成されるものである。

ひとつー見るべきではないものすべて、心を捉えて至高のアッラーを思い起こすことから自らの想念を遠ざけてしまうものすべてから、目を閉ざし、見たいという欲求を抑えること。

預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）は次のように言われている。

**「一目（見るべきではないものに目を）やることは、アッラーに呪われレイブリースの矢から出た毒の矢を受けるようなものです。ですからアッラーを畏れてそれを振り払う者には、至高のアッラーが心に甘美な信仰をもたらしてくださいます。（訳注 9）」**

それからジャービルがアナスを通して伝えるには、アッラーの御使いさま（アッラーの祝福と平安あれ）は次のようにも言われている。

**「五つのものは、断食齋戒する者のサウムを無効にしてしまいます。嘘、陰口、悪口、偽の誓い、欲に身をまかせて一目やることです。（訳注 10）」**

ふたつーばかげた話や嘘、陰口や悪口、辛らつな言葉、口げんかから舌を守ること。そして沈黙を心がけ、至高のアッラーを思念（ズィクル）し、クルアーンの読誦に励むこと。これを舌のサウムと呼び、ビシュル・ブン・アル＝ハーリス（訳注 11）が伝えるには、（預言者さまの孫弟子にあたる）スフヤーン（訳注 12）は「陰口はサウムをダメにしてしまう。」と言ったという。またライスが（同じく孫弟子にあたる）ムジャーヒドの言葉として伝えるには、「ふたつのものはサウムを無効にしてしまう。陰口と嘘だ。」とのことである。

さらに預言者さまは次のように言われた。

**「サウムは盾のようなものです。ですから皆さんのうち誰かがサウムをしていたとしたら、淫らな行いや愚かしい振る舞いをしてはなりません。そして誰かが争いをけしかけようとしたり、罵り始めたりしても、「私は断食の身です。私は断食の身です。」と言って相手にしてはなりません。（訳注 13）」**

ある伝承によれば、「アッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）の時代にあるふたりの女性が断食をしたという。日暮れ近くになって彼女ら二人は猛烈な飢えと乾きに襲われ、このままでは倒れてしまいそうだとアッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）のところへ断食を解く許しを請いに行った。御使いさまは彼女らのもとに人を遣わそうと、うつわを持た

せて伝言を伝えた。「彼女ら二人に伝えてください。あなたたちが食べたものをこのうつわに吐き出さない、と。」すると彼女らのうち一人がどす黒い血と新鮮な肉を吐き出し、もう一人もまた同じように血と肉を吐き出して、うつわが一杯になった。人々はその知らせに驚いたので、御使いさまは次のように説明されたという。「彼女ら二人はアッラーが許されたものから身を制して断食し、至高のアッラーが禁じられたもので断食を解いたのです。隣り合って座り、二人して人の悪口を言い始めたのでした。さしずめ彼女らが吐いたものは、彼女らが食べた（悪口を言った）人たちの肉と言えます。（訳注一つまり人の悪口を言うことは、その人の肉を食べるにも等しい卑しい行いだということ）（訳注14）」

みつつ一耳にすべきでないものすべてから、耳を守ること。というのも、言うべきでないものはすべて耳にすべきでもないからである。それゆえに至高のアッラーは禁じられたものを貪る者と嘘偽りに耳を傾ける者とを等しく並べて言われている。

**『かれら（不信心に競う者たち）は嘘偽りばかりを聞き、禁じられたものを貪る。』**

（第5 アル＝マーイダ章 42 節）

**『なにゆえに聖職者や律法学者は、彼らが罪深いことを語り、禁じられたものを貪るのを禁じようとはしないのか。』**

（第5 アル＝マーイダ章 63 節）

それから陰口を黙って聞き過ごすのも禁じられたこと（ハラーム）である。

至高のアッラーは仰せられている。

**『（誹謗中傷する者たちと同席した）ならば汝らも彼らと同類である。』**（第4 アン＝ニサーウ章 140 節）

またそれゆえに預言者さま（祝福と平安あれ）は次のように言われたのである。

**「陰口をたたく者とそれに聞き入る者は、罪を分け合うのです。」**（訳注 15）」

次号に続く



《訳注》

- 訳注 1—スライム族出身の男に由来する伝承として、アッティルミズィー(3519)が出典。  
また、教友アブー・フライラに由来する伝承としてイブヌ・マージャ(1745)が出典。
- 訳注 2—アブー・ヌアイムが出典。また、教友イブヌ・マスウードに由来する伝承としてアルハティーブが出典。
- 訳注 3—教友アブー・フライラに由来する伝承として、アルブハーリー(1904)とムスリム(1151)が出典。
- 訳注 4—アルブハーリー(1894)とムスリム(1151)出典。
- 訳注 5—サハル・ブン・サアドに由来する伝承として、アルブハーリー(1896)とムスリム(1152)が出典。
- 訳注 6—アブー・フライラに由来する伝承として、アルブハーリー(7492)とムスリム(1151)が出典。
- 訳注 7—アブッダルドーイに由来する伝承として、イブヌ・アルムバーラクが出典。  
しかしながら伝承経路の信憑性は弱性と判断される。
- 訳注 8—アッティルミズィー(682)やイブヌ・マージャ(1642)が出典。  
「呼びかける者の声が…」から最後までを除いては、アルブハーリーとムスリムも出典。
- 訳注 9—教友フザイファに由来する伝承としてアルハーキムが出典。
- 訳注 10—アザディー出典の弱性伝承。
- 訳注 11—ビシュル・ブン・アルハリス(ヒジュラ暦 150~227 年) …通称ビシュル・アルハーフィー。敬虔さで知られる正しき人たち(サーリフーン)のひとり。バグダードに住み、バグダードで亡くなった。  
(アズヰリクリー著「アル=アアラーム(碩学たち)」第2巻 P. 54 参照)
- 訳注 12—スフヤーン・アッサウリー(ヒジュラ暦 97~161 年) …ハディースの伝承者としては最高位の「信徒の長(アミール=ル=ムウミニーン)」と呼ばれる大学者。クーファで生まれ育ち、マッカとマディーナに移り住んで、晩年はバスラで過ごす。彼が編纂したハディース集に「アル=ジャーミウ=ル=カビール(大全集)」と「アル=ジャーミウ=ツ=サギール(小全集)」がある。「一度覚えたものを忘れたことはない。」と自ら口にするほど、驚異的な記憶力の持ち主であった。(アズヰリクリー著「アル=アアラーム(碩学たち)」第3巻 P. 104 参照)
- 訳注 13—教友アブー・フライラに由来する伝承として、アルブハーリー(1894)とムスリム(1151)が出典。
- 訳注 14—預言者さまの召使いであったウバイドに由来する伝承として、アフマド(5/431)が出典。
- 訳注 15—アッタバラニーが弱性の伝承経路でイブヌ・ウマル由来の伝承として伝えるには、「アッラーの御使いさまは陰口を禁じられ、陰口に聞き入ることも禁じられた。」とある。

サ ウ ム  
断食齋戒の秘密 – 『宗教諸学の復活』より – (後編)

「やすらぎ」2004年10月号掲載文 / アブー・サキーナ前野@ダマスカス

前号では、「特別な人、つまり正しき人たち（サーリフーン）のサウム」を達成させるのに欠かせない六つの事柄のうち、三つまでを紹介するにとどまった。簡単なおさらいをして、続きを見てゆこう。

ひとつー見るべきではないものすべてから、目を閉ざし、見たいという欲求を抑えること。

ふたつーばかげた話や嘘、陰口や悪口から舌を守ること。

みっつー耳にすべきでないものすべてから、耳を守ること。

よっつー身体の残りの器官を罪から守ること。手足を避けるべき行いから、そしてお腹を断食明けの食事（イフタール）時に口にしてもよいものかどうか紛らわしいものから守ることである。ハラールな（許されている）食べ物を断つのがサウムなのだから、ハラーム（禁じられている）なものでそのサウムを解いていては、何の意味もなくなってしまはずだ。たとえば、この種の断食者は、城を築き、都市全体を壊す者に似ている。ハラールな食べ物も、質はよくても量を取り過ぎれば害となってしまうが、サウムはその食事を減らすためにあるのだ。副作用を恐れて薬の取り過ぎを避け、少量の毒を飲む者は愚か者である。まさにハラームは宗教を台無しにしてしまう毒であり、ハラールは少量であれば役に立つ薬となるが、取り過ぎは害をもたらすものである。サウムの目的は、そのハラールを摂取する量を減らすことにあるのだ。

預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）は言われている。

「飢えと乾きしか得られないサーイム（断食者）の何と多きことでしょう。（訳注 16）」

つまりそれはハラームで断食を解く者のことだとも、ハラールを断っておきながら、陰口を言うことで人々の肉によって断食を解く者のことだとも、あるいは身体の諸器官

を罪から守らなかった者だとも言われる。

いつつー断食明けの食事（イフタール）時に、お腹がいっぱいになるまでハラールの飲食物を取り過ぎないこと。ハラールでいっぱい満たされたお腹以上に至高のアッラーにとって腹立たしい器はない（訳注ーお腹も「器（ウィアーウ）」の一種だから）。断食をしていた者が日中食べ逃したものをイフタール時に取り返していたら、アッラーの敵を打ち負かし、欲望を克服するといった目的を、いったいどうやってサウムを通して達成できようか。さらにはもっと贅沢をするかもしれない。事実、他の月には食べないようなあらゆる食べ物をラマダーンのために蓄えるという習慣すらできたくらいである。ご存知の通り、サウムの目的はお腹を空っぽにして欲望を克服し、さらなるタクワー（アッラーを畏れる気持ち）を養えるよう自我を強くすることである。ところがその自我がもし日中欲を刺激され、願望を強めた上で美味しいものをご馳走され、満腹になったら、その欲望はますます強くなるばかりとなる。そうなってしまえば、最初から断食などせずにあつたほうがまだましというものだ。そもそもサウムの精神とその秘密は、悪へ悪へと引き戻そうとするシャイターン（悪魔）の手段となる要素を弱めることにあり、そのためには欲を少なくするしかない。つまりたとえサウムをしていなくても、夕食の量を今まで食べていたよりも少なめにすることが肝心である。それを日中食べなかった分まで夜にまとめて食べていては、サウムの効果は得られないであろう。

それどころか、礼儀としては日中寝過ぎないことも大切である。飢えと乾きをしっかりと実感し、物欲が弱められるのを感じることで、心が清められるからだ。そして毎晩ひと時は物欲を抑えるよう習慣づけることで、深夜の礼拝（タハッジド）やアッラーを思念すること（ズィクル）も楽になるであろう。そうすればきっとシャイターンが心をつきまとうこともなく、天を仰げばそこに真理の開示を垣間見るといった恩寵にあずかることもあるかもしれない。それゆえ自分の心と胸の間を食べ物袋とする者は、心眼が覆われてそうした神秘の一端を目にすることができない。またお腹を空っぽにする者も、覆いをはらい上げるにはそれだけでは十分とは言えず、至高のアッラー以外のものに対する興味関心をも空っぽにしなければダメである。肝心なのはそれに尽きると言ってもよく、すべての基本は食事を少なめにするということだ。

むつつー断食明けの食事（イフタール）を済ませたあと、自らの心を恐れと希望で困惑させ続けること。自分のサウムが受け入れられるか、拒絶されるか分からないからであ

る。またサウムに限らず、イバーダ（崇拜行為）のあとはいつもそうあろうとするのがよい。

アル＝ハサン・アル＝バスリー（訳注17）に伝わるところでは、あるとき彼は大笑いする人たちのもとを通りかかったという。

「至高のアッラーは、ラマダーン月を人間がアッラーへの忠誠において競い合う競技場とされた。ある者たちは勝ち組となり、また他のある者たちは負け組みとなった。驚くべきは先んじた者たちが勝ち、遅れをとった者たちが負けた日にふざけて笑う者である。もしアッラーが幕を開けたなら、善人は善行に勤しみ、悪人は悪行にふけるのを目にしたであろう。つまり（善人にとっては）行いが受け入れられた喜びでふざけている暇などなく、拒絶された者の喪失感に笑う気をどこかへやってしまうのである。」

アル＝アハナフ・ブン・カイス（訳注18）によれば、誰かにこう言われたという。

「あなたはもう高齢のご老人。スィヤーム（断食）は大変でしょう。」

「私はスィヤームを長旅のようなものとみなします。それに至高のアッラーに仕えるなかでの辛抱（サブル）は、かれの懲罰のなかでの辛抱よりも楽なものです。」

そう、これがサウムの内面的意味である。

ひよっとすると、あなたはこう尋ねるかもしれない。

「食欲と性欲を抑えるにとどまり、もろもろの意義には関心を払わなかった者も、法学者が言うには『その人の断食は正しい』ということですが、いったいそれはどういう意味でしょうか？」と。

知っておいていただきたいのは、表面的なことに重きをおく法学者たち（フカハーウ＝ツ＝ザーヒル）は表面的な条件を決定させるにあたり、先にあげた内面的な条件を決定づける根拠よりも弱い根拠で決定付けてきたということである。特に陰口とその類に関しては顕著な例であるが、そもそも表面的なことに重きをおく法学者が導き出すもろもろの義務や条件は、あくまでもこの世での生活に忙しい一般大衆が耐えられるものに過ぎない。

一方、来世に重きをおく学者たち（ウラマーウ＝ル＝アーヒラ）が強調するのは、受諾の条件であり、受諾によって真の目的に達することである。それゆえ彼ら来世に重きをおく学者たちは、サウムの目的が至高のアッラーの道德倫理（アフラーク）を身につけることにあるということをよく理解している。すなわちそれは本来の目的を常に見据えて行動することであり、できるだけ天使たちに見習って欲望を抑えることである。か

れら天使たちは欲望とは無縁の存在だが、人間は理性の光によって欲望を克服できるがゆえに動物よりは上の位にあり、欲望に打ち勝つには努力を要する分だけ天使たちよりは下の位にある存在である。それゆえ人間は欲望に溺れれば溺れるほど最低最悪の存在にまで堕ちて行き、獣と同類になってしまうが、逆にまた欲望を抑制すればするほど最高最善の存在としての高みに昇り、天使と同類になれる。天使たちは至高のアッラーと非常に近い存在であり、かれらを見習って、かれらのように振舞う者は、かれらのように至高のアッラーとお近付きになれるであろう。近しい者に似た者もまた、近しいものだからである。もちろん、ここでいうアッラーとの「近さ」とは、場所ではなく、性質においての近さであるのは言うまでもない。

《訳注－内容的に繰り返しが続くため、一段落割愛させていただく。》

食事や夫婦間の契りから身を制しながら、罪の入り混じったかたちで断食を解く者は、ウドゥー（礼拝前のお清め）で各部位を3回ずつ濡れた手でなでるだけの者に似ている。サウムの意味と秘密を理解した者はそう知るであろう。つまり表面的には（数から言っても）条件を満たしてはいるが、より大切な「洗う」という行為を省いてしまった者の場合。アッラーがお望みになれば、この者の礼拝も最低基本条件は満たしているがゆえに受け入れてはもらえるだろうが、より大きな徳（ファドル）を逃してしまっただけは確かである。一方、ウドゥーの各部位を3回ずつ洗う者は、基本と徳（推奨行為）をともに満たしたといえ、またそれこそが完璧な状態なのだ。

預言者さま（アッラーの祝福と平安あれ）は、かつてこう言われたという。

「サウムは信託（アマーナ）です。ですから皆さんはそれぞれ自分の信託を守るようにしなさい。（訳注19）」そして『まことにアッラーは汝らが信託として預けられたものを、元の所有者に返すことを命じられる。』（第4アン＝ニサーウ章58節）というアッラーの御言葉を読み上げてから、手を耳に置き、目に置いて言われた。「聴覚は信託であり、視覚も信託です。（訳注20）」つまりもしそれらがサウムに託された信託でなかったならば、「私は断食の身です、と言いなさい。（つまり、私は舌を守るために制しているのに、あなたの愚かしい誘いに応えるために舌を解き放ちなどしようか、という意味）」とは預言者さまも言われなかったはずである。

以上、すべてのイバーダには表面的なものと同面的なものがあり、皮と実があるということがお分かりいただけたであろう。さらにその実には段階があり、それぞれの段階

にはさらなる階層がある。

皮で実を覆い隠すのか、あるいは実を取る真理の探究者に加わるのか。

果たしてあなたはどちらを選択するだろうか。≫（「宗教諸学の復活」1/314～317より）

ガッザーリー師の「サウムの秘密」、いかがだったろうか。冒頭でムスリムを三種類に分け、「普通の人、特別な人、特別な人の中でもさらに特別な人…」と論じ始めたときには、正直言って「私は凡人に過ぎないから、あまり関係ないのでは…」と思ってしまった。サウム本来の目的を達成するための具体的なアドバイスが述べられている六つの項目に関しても、「特別な人、つまり正しき人たちのサウム」とあったので、個人的には関係のない理想論が展開されるのかと思った。ところが実はそうでもなさそうである。もちろん私たちの多くは凡人の域を超えず、「正しき人」になどいつなれるのか分からない状態にあるのが現実だが、「正しき人」になりきっていないからといって私たちの成長に役立つアドバイスをみすみすやり過ごしてしまうのは、あまりにももったいない話だ。

要はアッラーのお力添えを祈りつつ、志しを少し高く持てば、私たちの誰もが「正しき人」を目指しながらムスリムとしての日常生活に生かせるアドバイスではないだろうか。

そうやって改めて読み直してみると、身につまされる思いのする点がいくつもある。中でも、「食事は少なめに」という忠告は耳が痛いくらいだ。でも今年は、イスラームに導かれて11回目のラマダーンである。分かってはいるけどやめられない…そろそろそんな自分にも真剣に「喝!」を入れなければ…そんな気持ちにさせてくれたガッザーリー師のアドバイス、皆さんはそれぞれどんな風に受け止められたらだろうか。

慈悲深き我らの主アッラーが、皆さん方にとって今年のラマダーンを今まで以上に有意義で、幸多く、祝福に満ちたものとしてくださいますように。アーミン。

≪訳注≫

訳注 16—教友アブー・フライラに由来する伝承として、イブヌ・マージャ（1690）が出典。

訳注 17—アルハサン・アルバスリー（ヒジュラ暦 21 年＝西暦 642 年～ヒジュラ暦 110 年＝西暦 728 年）…マディーナで生まれ、バスラにて亡くなった「サイドニツタービーン（教友に従った者たちタービウーンーの長）」と呼ばれる大学者。（アズィリクリー著「アル＝アアラーム（碩学たち）」第 2 巻 P. 226 参照）

訳注 18—アルアハナフ・ブン・カイス（ヒジュラ前 3～ヒジュラ暦 72 年）…タミームの族長。寛大さで知られる著名な勇者。バスラに生まれ、預言者さまと同時代に生きたが、預言者さまを目にすることはなかったため、イスラーム史上 3 代目タービウーンーのひとりとみなされる。第 2 代カリフ・ウマルが彼を評価し、バスラの総督をしていた教友アブー・ムーサー・アルアシュアリーにアルアフナフを相談役として重用するように忠告したという。（アズィリクリー著「アル＝アアラーム（碩学たち）」第 1 巻 P. 276 参照）

訳注 19—教友イブヌ・マスウッドに由来する伝承として、ハライティーが良好な伝承経路により「マカーリム＝ル＝アフラク」の中で出典。

訳注 20—教友アブー・フライラに由来する伝承として、アブー・ダーワードが出典。

بسم الله الرحمن الرحيم

رمضان – تجارة رابحة- للأستاذ عمرو خالد

アムル・ハーリドの『ラマダーン—絶好のビジネス』

## ラマダーンをどのように迎えるか

### ☆硬貨の両面

スィヤーム（断食齋戒）は、ヒジュラ後 2 年目に義務として定められた。つまり、預言者さま（祝福と平安あれ）はそれ以来 9 年間ラマダーンに断食齋戒したわけである。またスィヤームは、ジハード（聖戦）が定められたのと同じ年に定められた。

両者の間にはほぼひと月しかなく、スィヤームは陰暦 8 月のシャアバーン月に、ジハードは陰暦 9 月のラマダーン月に定められたのである。（ラマダーン 17 日には、バドルの戦いが起こった）

### ☆深い関係

スィヤームから、私たちは「ジハードゥ＝ン＝ナフス（自我との闘い）」を学ぶ。だからこそその後には敵とのジハードが来るのである。自らに打ち勝てる者にとっては、敵に打ち勝つことなど容易く、自分との闘いにてこずる者は、自分以外に打ち勝つことなどできはしない。事実それゆえに、イスラーム史上における大戦勝利は、ラマダーン月にもたらされている。マッカ開城や、カーディスィーヤの戦い、ロードス島の征服、ニハーヴァンドの戦い等すべてがラマダーン月に起こったのである。

つまり、「ジハードゥ＝ン＝ナフス（自我との闘い）」こそが敵との戦いにおいて勝利をもたらす鍵となったのであり、もし今日のムスリムたちがあるべきかたちできちんとスィヤームをこなしたなら、現状は変わり、ウンマ（信仰共同体）も復興を見るであろう。

### ☆絶対と選択の間にあるサウム（断食齋戒）

イスラーム史上、スィヤームは二通りの段階を経て定められた。

ひとつは、任意で望む者だけが断食齋戒をするといったかたちである。夜、日没後に一度床についてからは、翌日の日没まで日中の飲食はもちろんのこと、夜間の食事も夫婦間の契りも許されないといったかたちでの断食齋戒であった。

その後、任意のスィヤームから絶対・義務のスィヤームへと移行したわけだが、1年にラマダーンのひと月と限られた時間だけを断食齋戒すればよく、夜間は夫婦間の契りも許されるこちらの義務のスィヤームのほうが、実はより簡単で易しいものである。

### ☆軽減と慈悲

至高のアッラーがスィヤームの規定を軽減するきっかけとされた出来事には、次のようなものがある。

ある日、教友ウマル・ブン・アル＝ハッターブさまが日没後に帰宅されたときのこと。すでに寝ていた妻を起こした彼は、彼女に自分の必要を満たして欲しいとお願いした。

「私はもう寝ていたのですから、近づかないで下さい」と拒もうとする彼女を、「いや、君は寝てなんかなかったよ」と言いくるめて押し倒し、結局夫婦の契りを結んだウマルさまは、翌朝になって預言者さまにアッラーの赦しを乞うてくれるようお願いするのであった。

もうひとつは、日暮れとともに畑仕事から疲れて帰宅したある教友の話。

「早く何か食わせてくれ」との夫の頼みに、妻はいそいそと食事の準備をするが、食事の用意をして戻ると、夫はすでにあまりの疲労で眠りこけていたのであった。やむなく



翌朝目が覚めてからも彼はものを口にしないままスィヤームを続けなければいけないこととなり、遂には、疲れきって倒れてしまった。

そこで至高のアッラーの御言葉が啓示されたわけである。

『汝らには断食齋戒の夜、妻と交わることが許された。彼女らは汝らの衣であり、汝らは彼女らの衣である。アッラーは汝らが自らを欺いているのを知っておられ、不憫に思われて、汝らを許された。だから彼女らと交わり、アッラーが汝らのために定められたところに従いなさい。また白糸と黒糸の見分けられる黎明になるまで、食べ、かつ飲みなさい。』(2:187)

もちろん、アッラーのお慈悲は、こうした出来事が起こる前からいつもしもべたちに注がれていた。ただただムスリム自らが、アッラーのお慈悲の大きさを痛感しやすいように、段階を経た啓示があるのである。もともとは1日50回の礼拝が義務付けられていたところを、捧げる回数は5回でもその報奨は50回分の礼拝に等しいものとされたこともまたわかり。アッラーの定めは、そのすべてが慈悲であり、常にムスリムにとってためになることが考慮され、難しいことを容易くしてくれるものなのである。

### ☆スィヤームの効果

果たして至高のアッラーがしもべたちにスィヤームを義務付けたのは、飢えと乾きを味わわせるためだけだろうか。至高のアッラーはこう仰せられている。(2:183)

『汝ら信仰する者たちよ、汝ら以前の者たちに定められたように、汝らにもスィヤーム(断食齋戒)が定められた。きっと汝らは主を畏れて自ら身を守ろうとする者となるであろう。』

したがってラマダーンに断食をしながら、タクワー(主を畏れ、自ら身を守ろうとする気持ち)が高まらなかった人は、本当のスィヤームをしなかったということになる。

「タクワー」とは、ラマダーンが終わってからもアッラーの命を実践するのに自らを忙しくし、禁じられたことから自らを遠ざけて、アッラーの懲罰から身を守ろうとすることである。

つまり、他の定時礼拝と同じように、ファジュルの礼拝も集団で捧げること。

道端では視線を下げること。

親孝行すること。

貧しい人や困っている人に嫌がらせをしないこと。

退廃した場所や度を越した娯楽施設に身を置かないこと。

女性は髪の毛を露わにしないこと。

要するに、ラマダーンが終わってからもアッラーの命じられるようにあろうとせず、禁じられるところから遠ざかろうとしない人は、本当のサウムを捧げてはいなかったということであり、ラマダーン中にはヒジャーブを着けていても、ラマダーンが終わったらヒジャーブを脱いでしまう女性のサウムは、本物ではなかったということである。

タクワー向上の目安は、崇拜行為の中でそれまでよりも良くなったという違いを見出すことや、アッラーとの関係において自分の状態が改善されることである。またそうしたときにこそ、私たちはスィヤームの効果が確かにあったことを確認するのである。

#### ☆アッラーからは必ず

『きっと汝らは主を畏れて自ら身を守ろうとする者となるであろう。』というアッラーの御言葉に、私たちは安心することができる。至高のアッラーからの『きっと（ラアッラ）』は、確実に達成される願いだからである。ムスリムはスィヤームを通してその実りであるタクワーを収穫することができるだろう。同時にまた、ムスリムはスィヤームとともに善行への動機が高まるのを見出し、悪行への動機が弱まるのを見出すであろう。それらすべてが、夜明け前のファジュルから日没のマグリブまでの間、飲み食いを断って、欲望を抑えたおかげなのである。

#### ☆スィヤームとともに変わる四つのもの

##### ①肉体の精神支配が弱まる

人間は皆、土からできた身体がアッラーの息吹からなる魂を包むかたちで存在している。天使は光だけ、ジン（妖霊）は火からだけでできているが、人間は土からできた身体とアッラーよりの魂とが混ぜ合わさった被造物なのである。至高のアッラーは次のように仰せられている。『われはその者（人間）を完全に形作った。それからわれの魂をその者に吹き込んだとき、汝ら（天使たち）は彼にサジダしなさい。』と（命じた）。』（ヒジュール章 29 節）

人間の半分は大地から、そしてもう半分は至高の天からなっており、魂も身体の助けなくしては自らの主のもとへ昇ってゆくことはできず、それぞれが、自らの根源へと引き戻ろうとする。身体の命は、食べ物や飲み物といったすべて地上からいずるものにより、魂の命は、様々な崇拜行為や忠誠行為によるのである。

## ☆治療法を間違えたはず

悩み事や心の病の原因は、魂の栄養をないがしろにして、身体の栄養ばかりに関心を持つことにある。何か足りないという不満足感、焦燥感に襲われ、それまで以上に美味しいものを飲み食いしたり、趣味に時間を費やしたりして心の平安を得ようとするが、心の空虚さは増すばかり、といった経験はないだろうか。無理もない。治療法を間違えたのがその理由である。治療法とすべきは、礼拝に立ったり、サダカ（施し）をしたり、クルアーンを読んだりすることなどによって魂の主になんか近づくこと、魂に薬を与えることだったのである。

身体の必要性や衝動は、魂にとっての足かせにも例えられる。つまりサウムの役割は、人を空腹と乾き、欲望から遠ざけることによって、魂をその足かせから救うことにあるのである。

## ②欲望にしつけを与える

心理学者が言うには、人間の行動を左右する最大の動機となるのは「性欲」である。まさに「サウム」は飲食を控えることでその性欲を弱める効果をもたらす。だからこそ預言者さま（祝福と平安あれ）は結婚できない若者たちにサウムを勧めたのである。飲食を絶つことで性欲を弱めることは、サウムの目的である「タクワー（アッラーを恐れ、自らの身を守ろうとする気持ち）」を達成する助けとなるのだ。

## ③努力

### ④善い人たちと共にいること

身体の足かせから人を放ち、性欲を弱めるサウムは、同時に対照的な二つの効果をもたらしてくれる。ひとつは、努力することであり、目の前の食べ物や飲み物があっても日没までは一分前といえども一切それに手をつけないでいることは、一種の自己鍛錬であり、努力であると同時に、タクワーの一形態といえよう。

もうひとつは、善良で敬虔な人たちを好むようになることであり、夜ラマダーン期間中のみの特別な礼拝「タラーウィーフ」に参加することで、自然と毎日敬虔なムスリムたちと共にいる時間ができ、やがては「タクワー」向上の助けとなる善良かつ敬虔な人たちのことが好きになってゆくのである。

さあ、今から一緒に、預言者さま（祝福と平安あれ）が教えてくださるラマダーンの徳と忠誠行為への報奨、そしてラマダーンの日々に行う善行の徳を実感してみよう。

#### ☆計算なしの報奨

教友サルマーン・アル＝ファーリスィー（アッラーのご満悦あれ）によると、「シャアバーン月の最後の日に、アッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）は次のようにお話をくださった。『皆さん、祝福された偉大な月がやってきます。その月には、千夜よりも徳高い一夜があります。（つまり、その夜にする善行は、84年分の善行よりも徳高いということ）アッラーはその月の日中に断食齋戒することを義務づけられました。その月の夜間、礼拝に立つことは自発的な行為とされました。その月に数ある善行のひとつをしてアッラーに近づこうとする者は、ほかの月に義務を捧げたのと同じとみなされます。またその月に義務を捧げる者は、ほかの月に70もの義務を捧げたのと同じとみなされます。それは忍耐の月です。そして忍耐の報奨は、天国です。そしてそれは平等の月でもありません。その月においては、信徒の糧は増えるばかりです。その月に齋戒者の齋戒を、食事を施すことによって解く者は、罪の赦しを得るだけでなく、地獄の炎から解き放たれ、齋戒者の報奨を減らすことなく同じだけの報奨を得られるでしょう。』するとサハーバが言った。「アッラーの御使いさま、我々皆が齋戒者に施しの食事を与えられるわけではありません。」そこで預言者さま（祝福と平安あれ）が答えて言われた。『アッラーはこうした報奨を、なつめやし一粒、あるいは水一杯、あるいはチーズ一欠けらで齋戒者の齋戒を解く者にお与えくださるのです。その月の前半は慈悲であり、後半は赦し、後半は地獄の炎からの解放です。』」（バイハキー出典）

#### ☆気持ちを改めよう

預言者さま（祝福と平安あれ）は言われている。

『皆さんのもとに祝福の月、ラマダーン月がやってまいりました。その月にはアッラーが皆さんを覆い包んでくださり、皆さんが善行に競い合うのをご覧になって、天使たちを前に皆さんを誇りに思ってくださいでしょう。ですから皆さん方のよいところをアッラーに見せてやってください。まことに不幸な者とは、至高のアッラーのお慈悲を禁じられた者のことをいうのです。』」（バイハキー出典）

地獄の業火からの解放や、罪の赦し、そして忠誠行為への慈悲が、アッラーに少しでもよいところをお見せしようという気にさせてはくれないだろうか。

### ☆本物のサウムをした人たち

預言者さま（祝福と平安あれ）は次のように言われている。

『ジャンナ（天国）には、ライヤーンという門があります。審判の日にそこからは、断食齋戒者たちが入ってゆくのです。別の人たちはその門からは入ってゆけません。「齋戒者たちはどこか」という声が響き渡り、齋戒者たちはそこから入ってゆきますが、中でも最後の齋戒者が入った後はその門は閉ざされ、それ以上誰も入ることはできないのです。』（ブハーリー出典）

ハディースをよく考えてみよう。

預言者さま（祝福と平安あれ）が言われたのは、「門が天国にある」つまり、天国の中にあるということであって、「天国にとっては、ある門がある」とは言われていない。門の名前「ライヤーン」もまた入門者たちの行いに相応しいものといえよう。なぜなら彼らはラマダーンの日中、渇きと飢えの状態にあったからである。とはいえ、ムスリムであれば誰もがラマダーン中は断食齋戒をするのに、なぜ「齋戒者たちはどこか？」と呼ばれるのだろうか。それは彼らが本物の齋戒をした者たちだからであり、ラマダーンに相応しい気遣いと行いを果たしたからである。

それから、もともと天国の民は食べ物や飲み物などを楽しんでいるはずである。ならばなぜその門は「ライヤーン（渇きを癒すもの）」と呼ばれるのだろうか。それはその門に入ることで、ラマダーン中自らに禁じた様々な欲求や欲望すべてが癒されるからであり、そこから得られるものは魂と肉体両方にとっての「癒し」となるからである。

### ☆彼らが禁じられたのはなぜか？

食べ物や飲み物は断ったとはいえ、女性に声をかけたり、テレビの前で長時間過ごしたりすることをやめなかった人が、そのライヤーンの門から天国入りすることができると思うだろうか。あるいは飲み食いはしなかったものの、歌や踊り、化粧や人前でお洒落に着飾ることをやめなかった人が、そのライヤーンの門から天国入りすることができると思うだろうか。こういった人たちまでが、本物の齋戒をし、齋戒の礼儀に気をつけることを怠らなかつた人たちと一緒にライヤーンの門から天国入りできると思うだろうか。

### ☆その住人の一人となろう

預言者さま（祝福と平安あれ）は次のように言われている。

『ジャンナはラマダーン月のために着飾ろうとします。ラマダーン月になると、ジャンナはこう言うのです。「アッラーよ、この月にはどうかわたしのためにあなたのしもべたちの一部を住人としてお与え下さい。」それから天国の美女はこう言います。「アッラーよ、この月にはどうかわたしたちのために夫をお与えください。」ですからラマダーンに自らを守った人、酔うものを飲まず、信徒を中傷せず、間違いを犯さなかった人には、アッラーが毎晩天国の美女たちの一人と夫婦にしてくださり、金と銀、そしてルビーでできた城を天国に築いてくださるでしょう。もしその城の中にこの世のすべてが集められたとしても、ヤギ小屋ほどにしかならないのです。』（タバラーニーの出典）

### ☆ハッジの代わり

預言者さま（祝福と平安あれ）は次のようにも言われている。

『信じながら、報奨を期待しながらラマダーンを断食齋戒しきった人は、それまでの罪を許してもらえるでしょう。』

（ブハーリー出典）

またこうも言われている。

『信じながら、報奨を期待しながらラマダーン中（義務に加えて夜間）礼拝に立つ人は、それまでの罪を許してもらえるでしょう。』（ブハーリー出典）

つまり、ひと月すべてをあるべきかたちで断食齋戒できる人は、ぜひそうすべきであり、そうすればアッラーがすべての罪を許してくださるということである。それができない人は、アッラーの御許における報奨を期待しながら礼拝に励むことで許しがあり、それもできない人は、ライラトゥール＝カドルに礼拝するだけでもいいのである。つまりラマダーンの最後の10日間にライラトゥール＝カドルを探し求めながら礼拝に立つことで、アッラーのお許しが得られるのである。

### ☆ラマダーンのほかにはない

預言者さま（祝福と平安あれ）は次のようにも言われている。

『一日五回の礼拝（はその礼拝ごとに）とジュムアの礼拝からジュムアの礼拝、そしてラマダーンからラマダーンまでは、その間の罪を贖ってくれるものとなります。』（ティ

ルミズィー出典) ≪訳注…新たな礼拝は数時間分の罪の贖いとなり、新たにジウムアの礼拝に参列することは、1週間分の罪の贖いとなり、新たにラマダーンのサウムを全うすることは、1年分の罪の贖いとなるということ。≫

つまり一日の礼拝で贖える罪もあれば、ジウムアの礼拝が必要な罪もあり、ラマダーンのほかには贖えない罪もあるということである。だからこそ預言者さま(祝福と平安あれ)は、シャアバーン月にこんな風に祈られていた。

『アッラーよ、ラジャブ月とシャアバーン月において私たちに祝福してください。そしてどうか私たちにラマダーンをもたらししてください。』(タバラーニー出典)

ラマダーン月をもたらすというかたちでしか、預言者さまが長生きを祈られたことはなかったのである。また彼(祝福と平安あれ)はこうも言われている。

『スィヤームとクルアーンは、審判の日にもしへの執り成し役となってくれます。

スィヤームはこう言うのです。「主よ、ワタシは彼から飲み食いを禁じました。」

そしてクルアーンはこう言うのです。「主よ、ワタシは彼から夜の睡眠を禁じました。」

するとアッラーが言われます。「取り成すがよい。」と。』(アフマド出典)

#### ☆報奨を保証するものの数々

預言者さま(祝福と平安あれ)は、次のようにも言われている。

『ラマダーンが来ると、天国の門の数々が開かれ、地獄の門の数々は閉ざされます。そしてシャヤーティーン(悪魔たち)は足かせをつけられるのです。』

(ブハーリーとムスリム出典)

つまり悪魔たちは、人間が善行に励みやすいように身動きできなくされるということである。だからもし無意味に夜更かしをしたり、罪を犯したり、遊びほうけてしまうような場合は、シャイターン(悪魔)のせいではなく、自分自身に原因があるといえよう。威厳に満ちた主は、しもべたちがラマダーンで得られる報奨を確実なものできるように保証してくださっている。

ジャンナ(天国)の門の数々が開かれ、ラマダーンの民の中でそこを住まいとするに相応しい者たちのためにジャンナが用意される一方で、ジャハンナム(地獄)の門の数々は閉ざされ、しもべたちに慈悲の数々が広がってゆく…。そしてしもべたちを誘惑できないように、悪魔たちは足かせをつけられて身動きできなくされるのである。

#### ☆地獄からの解放を与える御方は、贈りものを取り戻そうとはしない

預言者さま（祝福と平安あれ）はこうも言われている。

『ラマダーンが来ると、声高に呼びかける者が現れます。「善行を求める者よ、おいでなさい！悪行を求める者よ、小さくなりなさい（恐れ畏まりなさい）！」と。ラマダーンにはアッラーに地獄の炎から解放してもらえる者たちがいます。しかもそれは毎晩の話なのです。』（ティルミズイー出典）

これほどすごいチャンスはない。至高のアッラーが地獄の炎からの解放をあるしもべのために一度お定めになるということは、もう二度と地獄行きを定められたりはしないということである。そしてそのしもべは善行のみを捧げられるようになり、幸せな最期を迎えるまでずっとアッラーに近づき続けることができるようになるのである。

### ☆主の御恵み

さらに預言者さま（祝福と平安あれ）はこうも言われている。

『サーイム（断食齋戒をする人）には、そのサウムを解くときに払い返されることのない祈りがあります。』（イブヌ・マージャ出典—訳注…つまりイフタール時のドゥアーは叶えられる、ということ）

そしてこうも言われている。

『ラマダーンになって罪を許されない人は、屈辱を受けるでしょう。』（ティルミズイー出典）

祈りが聞き遂げられるサウム中に祈らなくて、いつ祈るというのだろうか。

数々の慈悲と業火からの解放の月に罪を許されなくて、いつ罪を許され、地獄の業火から解放されるというのだろうか。

預言者さま（祝福と平安あれ）が威厳に満ちた主の御言葉として言われる言葉（ハディース・クドゥスィー）に耳を傾けてみよう。

『『人のあらゆる行いは人自らのためにある。サウムをのぞいては、サウムはわれのためであり、われが報奨を与えよう。』だから誰であれ、サウムをしながら下品なことをしたり、叫び声を上げたり、愚かなことをしたりしてはなりません。たとえもし誰かが悪口を浴びせたり、争いをけしかけようとしたりしても、「わたしはサーイムです。わたしはサーイムです。」と言って相手にしてはならないのです。』

ムハンマドの自我を手中にする御方に誓って、サーイムの口臭は、アッラーの御許では麝香の芳香よりもかぐわしく、サーイムには二つの喜びがあります。イフタール時の喜びと、主とお会いするときの喜びです。（イフタール時のドゥアーは叶えられるため、



アッラーに祈りを聞き入れてもらえる喜びと、サウムという善行を全うしたことで、いざ生涯の清算を受けるときにアッラーのご満悦と報奨を頂戴する喜び)」（ブハーリー出典）

## 《様々なスィヤームのかたち》

### ☆普通の人のスィヤーム

それは食欲と性欲を抑えるだけのスィヤームである。義務を全うしたとは見なされるが、いくつもある前述の報奨を手にはできない。

『ひよっとすると、サーイムの中には飢えと乾きしか得られない人もいるでしょう。』（イブヌ・マージャ出典）と預言者さま（祝福と平安あれ）も言われた通りである。

それは「タクワー（アッラーを畏れて自ら身を守ろうとする気持ち）」を達成できなかったからであり、預言者さま（祝福と平安あれ）もこうはっきりと言われている。

『嘘偽りを語り、悪しき行いをやめない人もいますが、食べ物や飲み物を断つことがアッラーに必要とされているわけではありません。』（ブハーリー出典）

そう、つまり威厳に満ちた主は飲食を断ちながらも、自分で言うにしろ、聞き耳を立てるにしろ、見物するにしろ、嘘偽りを捨て置かない人のサウムを気にかけてはしないのである。

### ☆特別な人のスィヤーム

それは食欲と性欲を抑えるのに加えて、身体全体の欲を抑えるスィヤームである。つまり目は禁じられたものを見ることなく、耳は悪しきものを聞くことなく、舌は下品なことを語らず、手は暴力をふるうことなく、足は禁じられところへ赴くことなく、ムスリマであれば髪を覆う…などといった状態である。こうしたサウムを実行する人は、その徹底さに応じて前述の報奨を得るであろう。

### ☆特別な人の中でもさらに特別な人のスィヤーム

それは食欲と性欲、身体全体の欲を抑えるのに加えて、心を律するスィヤームである。つまり、心はアッラー以外のものにとらわれず、アッラー以外のものに気をとられることがないという状態である。こうしたサウムができた人たちこそ、サウムによる最高の位を得て、地獄の業火からその身を解放されるのだ。それは彼らが、ラマダーン月の間ずっとアッラーにサジダ（平伏跪拝）し続けた心の持ち主だからにほかならない。

ムスリム全員に忠告しよう。自分がラマダーン中に成し遂げたい目標を定め、それをきちんと書き留めることを。目標達成のために必要な手段と方法も書き添えておくといだろう。要は毎日その紙を見て、アッラーと自分の関係を常に見直すことが大切なのだ。

## 《ラマダーン・プログラム》

### ①あなたとサラ（礼拝）

預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）は言われている。

『 Masjidに行き来する人には、アッラーがジャンナにおいて行き来するたびに特別な場所を用意して下さるでしょう。』（イブヌ・ヒッバーン出典）

目標は、ひと月の間できるだけ毎日5回の礼拝を Masjidで集団にて、しかも最前列で捧げること。女性であれば、毎回礼拝の入り時刻になってすぐ（アザーンのあとで）捧げること。

スナナとして伝わる任意の自発的な礼拝（ナワーフィル）は、一日に12ラクアある。『12ラクア礼拝を捧げた人は、ジャンナにお城を築いてもらえるでしょう。』（ムスリム出典）と、ハディースにもある通りである。

ファジュルの前に2ラクア。

ズフルの前に2ラクアとズフルの後に4ラクア、あるいは逆（前に4で後に2）。

マグリブの後に2ラクア。

イシャーの後に2ラクア。

特にラマダーンには、毎日少なくともこれだけのナフルの礼拝をきちんと守りたいものである。

## ②あなたとクルアーン

例えば私はラマダーン月にクルアーンを二回完誦するという目標を立てよう。一回は最初の 20 日間の間に。もう一回は、最後の 10 日間の間に。それができなくても、少なくとも一回は完誦したいものである。(訳注…もともと本書は標準的に真面目なボーン・ムスリム向けに書かれたものであるため、比較的高い目標設定に気後れしないでいただきたい。一般的な日本人ムスリムにとっては、1 回完誦できれば十分である。)

クルアーンの一文字は、10 のハサナ (善行) と数えられる。だから、『ビスミッラーヒニッ=ラフマーニニッ=ラヒーム (慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において)』と読み上げたら、全部で 19 文字あるから、少なくとも 190 の善行を得られるのである。クルアーンの 1 ジュズウ (一部) は、7000 文字。つまり少なくとも 7 万の善行を得られるというわけである。しかもこんなのは 30 分で済むこと。(訳注…一般的な日本人ムスリムなら、少なくとも 1 時間はかかるだろう) クルアーン (訳注…計算からいうと、クルアーンの一部の**はず**) を一度完誦したら、その報奨は少なくとも 490 万の善行分あり、二回完誦したら、その報奨は少なくとも 3 億の善行分あることとなる。それもハサナ (善行) は 10 倍だけでなく、700 倍にも、それ以上にもなり得るのだ。

『アッラーはお望みの者に倍増してくださる。アッラーはその御恵み広大にして、すべてを知る御方。』  
(第 2 バカラ章 261 節)

## ③あなたとサダカ

教友アブドゥッラー・ブン・アッバース (アッラーのご満悦あれ) はこう言っている。「アッラーの御使いさま (祝福と平安あれ) は誰よりも寛大な御方だったが、ジブリールがクルアーンの復習にやって来るラマダーンのときはまた格別に寛大であった。その寛大さは、恵みをもたらすそよ風よりも大きかった。」(アルブハーリー出典)

「ジュード (寛大さ)」は「カラム (優しさ)」よりも一段上の美德であり、御使いさま (祝福と平安あれ) は寛大な人たちの中でも最も寛大だったのである。それから教友アブドゥッラー・ブン・アッバースが寛大さと共にクルアーンの勉強に言及したことは、最も深く人間の心に豊かさを植え付けるのは聖クルアーンなのだということを教えてくれる。それもそのはず、クルアーンこそが満ち足りた御方アッラーと人間との間を最も深くつなぐものだからである。

それから預言者さま（祝福と平安あれ）が大天使ジブリールと共に学びの機会を持たれたということは、敬虔で正しい人を愛し、彼らと共にいることがどれほどためになるかということを見せてくれる。敬虔な人を愛してそのそばにいることは、自分の信仰を守り、善行を重ね、報奨を得て、正しく導かれるためには大切なことなのである。

また、イブヌ・アッバースが預言者さまの寛大さの例えとした「風」は、その速さと強さ、やむことなき継続性、誰か特別な人だけに恵みをもたらすといった差別なしに、すべての人を包み込む普遍性を表している。預言者さまのサダカは、まさにそんなふうであった…いや、それよりもさらに素晴らしく、関係の近い人にもそうでない人にも、貧しい人にもそうでない人にも、すべての人に与えるのが彼のサダカだったのである。

**ムスリム諸君！君たちも毎日できるだけ止めることなく少しでもサダカをし続けることで、恵み多きそよ風のようになれるのだ。**

### 《サダカはラマダーンを60日にしてくれる》

ムスリムの兄弟、ムスリマの姉妹よ、1年にラマダーンのサウムを2回、いや10回したいとは思わないだろうか。難しいことではない。毎日サーイム一人に、あるいはそれ以上にたとえナツメヤシの実であれ、何かイフタール（断食齋戒を解く食べ物や飲み物）を提供したらいいのだ。だからマグリブの礼拝をしに masjid へ行くときは、ナツメヤシを持ってゆき、礼拝する人たちに配るといいだろう。サーイムの断食齋戒を解く人には、そのサーイムの報奨が（サーイム自身の報奨を減らすことなく）あり、地獄の業火からの救済があるのである。女性であれば、例えば自分の家族や夫の家族のためにイフタールを用意することで、同じような報奨を得られるだろう。

他にもムスリム男性であれば、サムナ（ギー）や砂糖など、イフタールに欠かせないものを袋に小分けして、貧しい人たちに配ることもできるはずだ。あるいは一度に全部してしまおうと思ったら、マグリブのときにナツメヤシの実を礼拝者に配って、できるだけのものを貧しい人にも配り、家族や親戚をイフタールに招待したらいいだろう。こうすることで、ひと月のラマダーンをあたかも1年もの実り豊かな時とすることができる。いや、アッラーの御心に適いさえすれば、何倍にも倍増してもらえらるだろう。アッ

ラーはその御恵み広大にして、すべてを知る御方なのだ。

#### ④あなたとタラーウィーフ

『信じながら、報奨を期待しながらラマダーン中（義務に加えて夜間）礼拝に立つ人は、それまでの罪を許してもらえるでしょう。』（アルブハーリー出典）という預言者さま（祝福と平安あれ）がお教えくださった好機を実現するために、タラーウィーフの礼拝でクルアーンを完誦するイマームの後ろに参列することで、クルアーン完誦を目指したい。もちろんこれは、個人でのクルアーン完誦とは別に、である。女性は色々と忙しいかもしれないが、できるだけ masjid に行ってクルアーンや勉強会の授業に耳を傾け、masjid の中に漂うサーイムたちの精神性を感じ、敬虔な女性たちと知り合うようにしたいものである。

#### ⑤あなたと親族付き合い

親戚付き合いを断つことは、赦しの到来を遅らせ、慈悲を遮断してしまう。親戚付き合いを持つとは、連絡をくれる親戚との付き合いを深めるのに限られたことではなく、あくまでも自分との付き合いを断った人たちにアプローチすることが優先されるべきなのである。

預言者さま（祝福と平安あれ）もこう言われている。

『つなぐ人とは、相手からのアプローチに応じる人のことをいうのではなく、親戚付き合いから離れて行った人をつなぐ人のことを言うのです。』（アルブハーリー出典）

できればラマダーン最初の 10 日に、訪問や手紙、電話や様子伺いなどを通してできるだけ親戚一同とつながりを持つようにすることで、お慈悲の降臨を願いたい。ラマダーンは初旬が慈悲であり、家族や親戚とのつながりを大切にすることは、アッラーのお慈悲をもたらすきっかけとなるからである。

#### ⑥あなたとダアワ（宣教）

まずは私たち全員が自分の家族から始めよう。父と母、兄弟姉妹に、本やカセットを薦めてみたり、よい言葉、よい模範、贈り物を与えたりすることで、自分の家庭から始めよう。それから自分自身のために目標を立ててみよう。ラマダーン月が終わるころに

は、誰かの導きのきっかけとなっていたい、という目標を立てるのである。

アッラーの御使いさま（祝福と平安あれ）は、次のように言われた。

『アッラーがあなたを誰かの導きのきっかけとさせていただきますことは、赤ラクダ（今で言う最高級車）を得るよりも素晴らしいのです。』（アルブハーリー出典）

それからこのラマダーン月に忘れてはならないのが、パレスチナやイラク、その他の地域で不義不正と戦う同胞たちのために祈ることである。たとえものの二分であれ、毎日イフタールの前に祈ることが大切だ。

さあ、私たち全員がこうした六つの項目達成とジハード戦士たちへの祈りをラマダーン月の目標の一つとしよう。必要なのは、誠実な気持ちと強い意志、そしてアッラーへの希望だ。すべての根底にある基本目標は、アッラーの赦しと業火からの救済なのである。

ムスリム全員に助言しよう。自分がラマダーン中に成し遂げたい目標を定め、それをきちんと書き留めることを。目標達成のために必要な手段と方法も書き添えておくといだらう。要は毎日その紙を見て、アッラーと自分の関係を常に見直すことが大切なのだ。

## ラマダーン・プログラム

関係	目標	具体的方法
私とサラ		

私とクルアーン		
私とサダカ		
私とタラーウィーフ		
私と親族づきあい		
私とダアワ		

اللَّهُمَّ إِنَّكَ عَفُورٌ كَرِيمٌ تُحِبُّ الْعَفْوَ فَعَفِّ عَنَّا

アッラーフンマ インナカ アフーウン カリームン  
トウヒップ＝ル＝アフワ ファ＝アフ アンナー

アッラーよ、まことにあなたは寛大にしてよく赦す御方。  
あなたは赦しを好まれます。ですからどうか私たちを赦してください

い。

# والحمد لله رب العالمين

※ ご意見、ご感想等のフィードバックは、[maeno711@yahoo.co.jp](mailto:maeno711@yahoo.co.jp) まで、よろしくお願い致します。ジャザークムツラーフ ハイラー。

\*\*\*\*\*  
\*

## ラマダーンにそなえよう

《参考文献》

- － 『アル＝フィクフ・アル＝マンハジ－神事編』 (シャーフィイー派法学解説書)  
ハン、ブガー、シャルバジ－共著 P. 73～91
- － イブヌ・ハジャルの『ブルーグ＝ル＝マラーム』 解説書  
『イウラーム＝ル＝アナーム』 ヌールッディーン・イトル博士著 Vol. 2, P. 393～429
- － 『ラマダーン～絶好のビジネス～』 アムル・ハーリド著 P. 5～21

編訳者 アブー・ハキーム前野 ©**ダール・ル・フダー・ジャパン** 2007  
all rights reserved.

**発行者** イスラミック・サークル・オブ・ジャパン  
Islamic Circle of Japan